

室町殿跡の発掘調査 — 足利将軍家の庭園 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 室町殿は室町幕府の足利将軍の邸宅で、第3代将軍義満が造営したことに始まります。「室町殿」の名称は、邸宅の正門が室町通に面していたことに由来しており、その位置は室町通の東、北小路（現在の今出川通）の北にありました。また、室町殿は庭園に数多くの花木が植えられていたことから「花の御所」とも呼ばれていました。ここは足利義満だけでなく、6代将軍義教^{よしのり}、8代将軍義政も邸宅として利用しており、室町幕府の名前の由来ともなりました。

室町殿跡の調査 これまで室町殿跡では8回の発掘調査が行なわれており、推定地北部では主に建物遺構、南部では主に庭園遺構が検出されています。

2020年1月から4月にかけて南部東端で、発掘調査を行ないました。調査の結果、室町殿の庭園遺構の池と9石の景石群を検出しました（写真1）。見つかった池は南岸と東岸で、L字形に屈曲しています。景石9石のうち、6石は互いに組み合わさっており、滝口の石組を構成しています（写真2）。

石組に用いられた石材は、いずれも一辺が1mを超え、最大のものは長辺が約2.75mにもおよび、重さは約10トンと推測されます。また、石材の種類はチャート^{かつ}・頁



写真1 石組全景（西から）



図1 洛中洛外図に描かれた室町殿（東側から見たようす）
『上杉本洛中洛外図屏風』（所蔵：米沢市上杉博物館）

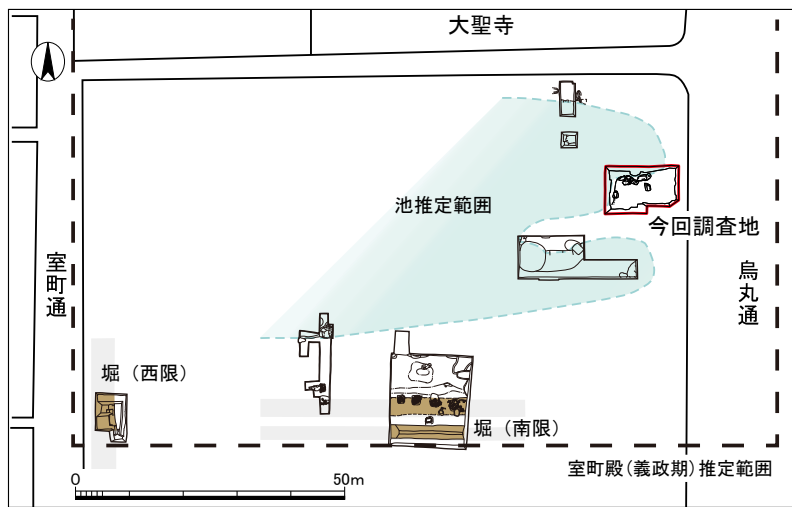


図2 池推定範囲図

岩ないし粘板岩・珪岩・ホルンフェルスと多様で、色彩や質感にも工夫がなされていたと考えられます。さらに巨大な景石を据えるために拳大の礫を敷き詰めた造成工事を行なっていることも確認できました。このように石材の大きさや種類と質感、丁寧な造成工事などから、今回検出した滝石組は庭園の主要景観の一部であったと考えられます。

また、庭園の造成土からは15世紀後半の土器が出土したことから、この遺構は、長禄3年（1459）に室町殿に移り住んだ足利義政によって造営されたことがわかりました。室町殿の庭園遺構の時期が

特定できたのは今回の調査が初めてのことで、庭園の変遷を考えるにあたって非常に重要な成果をあげることができました。

調査地周辺ではこれまでに4箇所庭園遺構を検出しており、池

の北岸・南岸を確認しています。しかし、詳細な時期については明らかになっていませんでした（図2）。これらの庭園遺構が同時期に存在していたとすると南北約45m、東西約60mの広大な池であったと考えられ、今回検出した遺構はその東端にあたることになります。

おわりに 16世紀中頃に描かれたとされる『上杉本洛中洛外図屏風』では、在りし日の室町殿の姿を見ることができます（図1）。

北部に建物、南部に池や植栽のある庭園が描かれており、これまでの調査成果とも合致します。ただし、ここに描かれている室町殿は実際の16世紀の情景ではなく、過去の理想化・概念化された義政期の姿であるという意見もあります。足利義政といえば、将軍在位中に応仁の乱が起こるなど、政治的な評価は必ずしも高くはありません。しかし、東山山荘（銀閣寺）の庭園の造営など、東山文化の担い手として文化的には評価の高い人物です。今回発見した庭園遺構からも義政の文化的な卓越性や作庭への熱意が感じられるのではないのでしょうか。（松永修平）



写真2 北側から見た滝石組